

立命館経済学著者別目録

凡例

- 一、この目録は『立命館経済学』第一卷第一号(一九五二年二月)から第二八卷第五号(一九七九年十二月)までに掲載された論説、研究、研究ノート、書評、資料、翻訳、その他を収録したものである。但し論説については項目を特に明記しなかった。
- 二、配列は執筆者名の五十音順とし、同一執筆者では巻号順によった。二人以上が共同執筆した場合もそれぞれに掲載した。
- 三、『立命館経済学』は通例年一巻で、各巻六号からなる。第十七巻五号・六号は欠号であり、第三巻は第七号までである。

相澤秀一

経済学の若干の基本問題

書評 吉村達次著『経済学方法論』

『資本論』の周辺

河上・経済学の今日的意義

私の履歴書

芦田文夫

《広義の経済学》否定論の系譜

——ブハーリン・宇野教授の所説をめぐって——

立命館経済学著者別目録

二九一 (六一九)

学界動向 経済理論学会第十二回大会	一四一
第七回社会主義経済学会	一六五
資料 社会主義のもとでの「使用価値と価値」(一)	一九四
” 社会主義のもとでの「使用価値と価値」(二)	一九六
” 社会主義のもとでの「使用価値と価値」(三)	三一一
足立政男	
研究 近世における山城農民の経済生活(一)	一一
” 近世における山城農民の経済生活(二)	一三
近世における畿内在郷商人の高利貸資本に	

ついで

——山城国乙訓郡神足村絞油商油屋弥兵衛
(現岡本家)の場合——

一一五六

研究 近世山城における在郷商人の商業経営につ

いて

——乙訓郡神足村絞油商「油屋弥兵衛」
について——

一一一

〃 封建体制崩壊に関する一考察

一一三

——畿内在郷商人の存在形態を中心に——

書評 庄司吉之助著『明治維新の経済構造』

一一二

研究 近世在郷商人の農地経営

一一三

〃 近世都市近郊に於ける農民生活

一一六

——城州乙訓郡今里村における
庄屋解職運動について——

近世における都市の下糞利用による農業経営

一一二

——京都と西岡地帯における農業経営の場合——

近世京都商人の商業経営について

一一五

——柏原家の店則より見た江戸店の
経営方針及び商人意識について——

近世における日本海沿岸の帆船航運の状況につ

て

——丹後国網野縮緬機業地帯における山中九
兵衛家の文書を中心として——

六一三

近世後期における地方商業資本の発達とその活躍 六一三

——丹後国浅茂川商人山中九兵衛家の場合——

近世における丹後縮緬産地問屋の利貸と土地集中

形態について

六一四

——丹後国加悦谷縮緬機業地帯における杉本
利右衛門家の文書を中心として——

近世丹後縮緬機業地帯における糸問屋の存在形態

七一

——丹後国加悦町杉本利右衛門家文書を中心
として——

近世丹後縮緬機業地帯における商業資本家の存在

形態

七一四

——丹後国加悦町下村五郎助家文書を中心と
して——

近世丹後縮緬機業における株仲間の一考察

八一

資料 宮津藩の丹後縮緬機業政策について(一)

九一三

〃 宮津藩の丹後縮緬機業政策について(二)

九一四

丹後機業地帯における労使関係について

九一六

研究 近世丹後縮緬機業における飛脚制度

について

資料 イタリア経済の動向

二〇一五六

近世京都商人の別家制度(一)

二〇一

近世京都商人の別家制度(二)

二〇一四

海外留学記 ミラノからスイスへの旅

二〇一五

海外留学記 ドイツの旅

二〇一六

近世における京都室町商人の系譜(一)

二〇一七

近世における京都室町商人の系譜(二)

二〇一八

近世における京都室町商人の系譜(三)

二〇一九

近世京都商人邦波家の江戸店経営とその没落について

二〇二〇

京都商人の商魂について(一)

二〇二一

京都商人の商魂について(二)

二〇二二

京都商人の商魂について(三)

二〇二三

老舗の店則から見た

二〇二四

老舗の店則から見た

二〇二五

老舗の家訓・店則から見た

二〇二六

老舗の家訓・店則から見た

二〇二七

老舗の家訓・店則から見た

二〇二八

老舗の家訓・店則から見た

二〇二九

老舗の家訓・店則から見た

二〇三〇

老舗の家訓・店則から見た

二〇三一

老舗の家訓・店則から見た

二〇三二

京都における老舗の経営から見た

遠慮近憂の商法と用心の経営

三三—五六

近世における老舗の家訓から見た

無理をしない商法と経営

三四—三二

近世における老舗の家訓・店則から見た

人づくりこそ企業づくりである

三五—五六

京都における老舗の家訓に学ぶ

老舗外与株式会社の歴史と経営哲学

三六—三四・五

阿部矢二

労働と社会発展の関係

一一—二

資本主義社会における小農経営

農地改革の結果の二、三について

一四—一

社会の階級性について

学生諸君へ

二二—

利潤と人民の生活との対抗関係

ソ同盟における富農対策

二五—

マルクス主義による人間改造の問題

唯物論についての覚書(其の一)

三一—四

二九三(六二二)

立命館経済学著者別目録

唯物論についての覚え書(その二・終)

四一三

世界観の生成

四一六

紹介 長谷部文雄著『資本論随筆』の紹介

によせて

五一三

資本主義社会における矛盾のひとつのあらわれ

五一五

封建地代の形態転化とその合法則性

八一

有沢広巳

エネルギー問題の所在

一一一四

有田正三

書評 関弥三郎著『社会統計学』

一一一

淡川康一

郷土産業考察の一例(上)

一一三

郷土産業考察の一例(中)

一一四

経済学と地理学との関係

一一五六

郷土産業考察の一例(下)

一一一

我国近世の経済思想(上)

一一三

—— 大山教授の近著を中心として ——

我国近世の経済思想(下)

一一五

—— 大山教授の近著を中心として ——

資料 工業史の一断片(上)

一一五

資料 工業史の一断片(下)

一一一

大量通信交通と新聞の匿名主義(上)

一一二

大量通信交通と新聞の匿名主義(下)

一一三

消費地理研究の一側面としての家計予算

一一四

カール・ビュヒアーの自叙伝について

一一四

ビュヒアー『国民経済の成立』の編成について

一一五

資料 「労働と律動」に於ける日本関係の記事

一一六

「国民経済進化論」の根本思想

一一一

国民経済と地理的環境

一一二

紹介 英国で入手した一地図帳に就いて

一一三

経済地理学に見た政治圏と経済圏

一一四

都府経済の段階と現今の広域経済圏の問題

一一三

井汲卓一

生産関係の国家的形態としての国家独占資本主義

について

一一二

池上 博

手嶋教授の国家独占資本主義論

一九四

一井 昭

資料 フレット・エルスナー「独占価格と独占利

潤」(桜井富雄・吉田伸雄氏他三名共訳) 二六二

伊藤 武夫

資料 独占資本主義確立過程の工業構成(その一)

二〇一五六

——『工場統計表』からみた「大正期」
民営工業の発達趨勢——

稲村 勲

研究 ジョン・ロックの経済理論とその体系性(上)

一八一四

〃 ジョン・ロックの経済理論とその体系性(下)

一八一五・六

〃 ウィリアム・ベティの経済理論(上)

一九一六

——市民革命経済理論の形成——

立命館経済学著者別目録

〃 ウィリアム・ベティの経済理論(中)

二〇二

——市民革命経済理論の形成——

〃 ウィリアム・ベティの経済理論(下の二)

三一一

——市民革命経済理論の形成——

〃 ウィリアム・ベティの経済理論(完)

三二六

——市民革命経済理論の形成——

井上 巖次郎

時論 中小工業と長期金融

一一三

中小企業対策としての調整組合に関する問題点

一一五六

危機に立つ反独占政策

一二四

時論 最近の中小企業立法

二一六

新企業担保制度に関する若干問題

三二七

時論 中小企業団体組織法案の問題点

六一一

井上 次郎

時論 ボンド過剰の問題

一一三

リカードオ理論における貿易による搾取の問題

一一五六

古典学派の経済的自由の制度

四一四

——スミスからリカードオへ——

二九五 (六二三)

立命館経済学(第二十八卷・第三・四・五合併号)

二九六(六二四)

リカアドオにおける地代理論の発展

五—五

価値法則の国際的展開についての一考察

六一—三四・五

古典学派の二つの貿易理論

二—五六

リカアドオと農業

三—五六

上野俊樹

三—三四

平田清明氏の価値論

三—三四

井上晴丸

九—六

経済学史の意義とその方法(一)

三—一

戦後日本の農業制度の破綻

九—六

いわゆる「平均化原理」と「限界原理」

二—五六

上原信博

三—五六

——白杉理論への疑問——

二—五六

現段階における農業危機

三—五六

協同組合とマルクス主義

三—一二

——協同組合発展の歴史的弁証法——

三—一二

国家独占資本主義論についての覚え書

二—三

植村省三

六—六

——池上惇氏の主著『国家独占資本主義論』を讀んで——

二—三

資料 現代経営の理論的基礎(上)

六—六

——その典型としてのドラッカー理論——

七—一

〃 現代経営の理論的基礎(下)

七—一

——その典型としてのドラッカー理論——

二—三五六

研究 いわゆる分権的管理組織について

七—四

〃 経営学における制度論的思考

八—二

〃 株式会社支配論の新しい傾向

九—三

——A・A・バーリの所説をめぐって——

二〇—五六

岩田勝雄

三—六

現代企業の構造と経営者の活動

二〇—五六

外国貿易の必然性再考

三—六

国際価値論の諸論点について

三—六

——経営職能論序説——

二〇—五六

内山 昭

研究 「虚偽の社会的価値」の理論的根拠 三—五六

——井上晴九教授の所説にふれて——

宇都宮 巖

米国に於けるアクセレレイション問題 一—五・六

大谷 政敬

マルクスの国家観と財政論 一七—三四

大橋 隆憲

「経済学方法論」と統計方法 二—五六

大藪 輝雄

紹介 J・ニヒトヴァイス『メクレンブルグにお

ける農民追放』 五—二

〃 H・ルック『J・H・V・チューネンの

経済学説によせて』 五—五

資料 部落有林野解体の一局面 六—三

——奈良県吉野郡旧中荘村の場合——

立命館経済学著者別目録

研究 グーツヘルシャフトの成立 六—五

——メクレンブルグを中心として——

エス・デ・スカスキ『中欧および東欧における

いわゆる「再版農奴制」の基本的諸問題』 八—一

ザクセン州における農業労働力の存在形態(一) 一〇—二

現段階における農民層分解の特質 三—五・六

資料 マックス・ウエーバー『東エルベ農業労働

者の状態における発展諸傾向』(一)(吉矢

友彦氏との共訳) 三—四

〃 マックス・ウエーバー『東エルベ農業労働

者の状態における発展諸傾向』(二)(吉矢

友彦氏との共訳) 三—五

学界動向 土地制度史学会一九六五年度秋期学術

大会 一四—五

資料 東ドイツにおける民主的土地改革と農業の

社会主義化(一) 一九—一

——シュトラスブルク郡の場合——

〃 東ドイツにおける民主的土地改革と農業の

社会主義化(二) 一九—二

——シュトラスブルク郡の場合——

二一九七 (六二五)

井上晴丸先生の学問的業績

三一五六

翻訳 パルヴス『世界市場と農業恐慌』(一)(鈴木

敏正氏との共訳(以下同))

三一三一

〃 パルヴス『世界市場と農業恐慌』(二)

三一四

〃 パルヴス『世界市場と農業恐慌』(三)

三一三

〃 パルヴス『世界市場と農業恐慌』(四)

三一四

大山敷太郎

わが国塩業労働における封建性と近代性との交

錯(中)

一一一

——特に塩業における親方制度の推移に関連
しての一試論——

わが国塩業労働における封建制と近代性との交

錯(下)

一一三

——特に塩業における親方制度の推移に関連
しての一試論——

わが国漁業における共同経営の典型

一一五六

わが国労働関係の特質(一)

一一四

——そこにおける封建制の根強き残存——

いわゆる縁故募集(採用)の典型

一一三

——郵政省「現業職員の実態に関する調査」
に基く分析——

わが国鉱業労働における封建性と親方制度

三一四

——特に、その解体過程に
関連させての一試論——

熊野灘沿岸漁村における「本役〔本家株〕・半役

〔分家株〕制」と漁業共同経営

三一七

わが国鉱業(金属)における親方制度の解体過程

四一一

——「わが国鉱業労働における封建性と親方
制度」補論その一——

高島炭坑に見る明治前期の親方制度の実態

四二二

——「わが国鉱業労働における封建性と親方
制度」補論その二——

わが国鉱業「石炭」における親方制度の解体過程

四一三

——「わが国鉱業労働における封建性と
親方制度」補論その三——

わが国鉱業における「友子同盟」の解体期の実態

四一五

——「わが国鉱業労働における封建性と親方
制度」補論その四——

岡崎栄松

価値論および分配論におけるアダム・スミスと

リカードウ(上)

六一一

価値論および分配論におけるアダム・スミスと

リカアドウ(下)

六一二

T・ガイガーの『資本論』批判について

六一六

紹介 エ・ペ・ゲンキナ『ソヴェト国家の新経済

政策への移行(一九二一—一九二二年)』七一三

資料 ヴェ・パトウイレフ『社会主義のもとでの

商品生産の必然性と本性について』(訳)七二四

いわゆる使用価値の捨象にかんする一考察

二二—三

——故白杉教授『価値の理論』によせて——

白杉価値論にかんする若干の考察

二二—五六

——いわゆる「効用測定の原理」を中心として——

海外留学記 ソヴェト旅行雑感

二五—四四

書評 内田義彦『資本論の世界』

二六—一

初期マルクスの経済理論について

二六—三四

——『経済学Ⅱ哲学手稿』を中心として——

アダム・スミスの自然価格論について(上)

二七—三

——生産価格論の学史的考察——

アダム・スミスの自然価格論について(中)

二七—四

——生産価格論の学史的考察——

立命館経済学著者別目録

アダム・スミスの自然価格論について(下)

二七—五

——生産価格論の学史的考察——

岡崎不二男

動学的レオンテイエフ・システムとフィード・バ

ック効果

七—六

研究 地域産業連関表利用の一例

一〇—二

計量経済学モデルによる戦後景気循環の構造分

析(一)

三—一

——制約された循環か自由な循環か——

計量経済学モデルによる戦後景気循環の構造分

析(二)

三—三

——制約された循環か自由な循環か——

書評 浜崎正規著『近代経済学の方法と理論』

三—四

岡庭 博

日本海運における独占形態

一〇—三

岡橋 祐

フィリップ・シドニーに就いて

一—五六

二九—九(六二七)

岡本 正

書評 芦田文夫著『社会主義的所有と価値論』 二六一—

岡本幸雄

研究 徳川中期における尾張一農村の考察 四一五

——葉栗郡里小牧村の農業構造——

資料 徳川時代における農民の「脱落」について 五一—

〃 近世丹波馬路村における「両苗郷土」の存

在形態(一)

五一—

〃 近世郷土の存在形態(上)

六一—

——丹波馬路村「両苗郷土」の経済的

基盤と村方支配——

〃 近世郷土の存在形態(下)

七六一

——丹波馬路村「両苗郷土」の経済的

基盤と村方支配——

幕末・明治維新における郷土の政治的運動の展開 九二—

——旗本領丹波馬路両苗郷土について——

置塩信雄

新古典派成長論の政策的含意

三三—三四

奥田修三

資料 幕末の株仲間 七一—

——京都嵯峨・梅津・桂三ヶ所材木仲

間について——

近世後期における都市商人 七五—

——奈良晒市青芋中買について——

大和における国訴 八四—

——近世大和の農業構造との関連において——

奥地 正

戦後日本資本主義と林業・山村問題の展開構造 三三—五六

国有林における労働組織の形成と展開(一) 三三—四四

——東北・秋田国有林を中心に——

国有林における労働組織の形成と展開(二) 三三—五六

——東北・秋田国有林を中心に——

国有林における労働組織の形成と展開(三) 三三—四四

——東北・秋田国有林を中心に——

国有林における労働組織の形成と展開(四) 三三—四四

——東北・秋田国有林を中心に——

小椋広勝

世界市場と世界経済体制

九一三

現代の恐慌とマルクス恐慌論

一六三四

小野一郎

紹介 ツアゴロフ編『政治経済学教程、第二卷、

社会主義』とソ連邦における社会主義政

治経済学の体系をめぐる論争

二四二

社会主義的分配関係の本質について(一)

二五―五六

社会主義的分配関係の本質について(二)

二六二

資料 ヴエ・エス・ネムチーノフ 社会的分業の

静学モデル

二七一

翻訳 エス・エス・シュエーホフ「社会主義経済の

目的関数の問題によせて——いくつかの

歴史的的局面——」

ア・ゲ・グランベルグ「社会厚生目的関数

と実用国民経済モデルにおける最適性基

準」(上)

二二二

ア・ゲ・グランベルグ「社会厚生目的関数

と実用国民経済モデルにおける最適性基

準」(下)

二二二

と実用国民経済モデルにおける最適性基

立命館経済学著者別目録

準」(下)

社会主義経済と最適経済機能システム論

三一―

——経済学方法論にかかわって——

三一―三四

社会主義经济管理における民主主義の原理とその

展開の構造について

小野 進

シュンペーターの景気循環論

二四―四

——その批判的考察——

二四―四

帝国主義論

一六―三六

——シュンペーターとレーニン——

一六―三六

学界動向 経済理論学会第一五回大会

一六―三六

研究 近代経済学批判の目的と方法、そして近代

経済学の性格規定についての若干の考

察(その一)

一七一

——関恒義著『現代資本主義と経済理

論』の所説に関連して——

近代経済学批判の目的と方法、そして近代

経済学の性格規定についての若干の考

察(その二)

一七一

——関恒義著『現代資本主義と経済理

論』の所説に関連して——

三〇一 (六二九)

三〇一 (六二九)

立命館経済学(第二十八卷・第三・四・五合併号)

紹介 A・ライオンフーフト『ケインズ派経済学

とケインズの経済学』(一) 三二二

——貨幣理論の研究——

〃 L・G・レイノルズ『経済学の三つの

世界』(一) 三三一

〃 カール・B・ターナー『ソヴェートに

おけるケインズ批判の変遷』(一) 三二二

〃 A・ライオンフーフト『ケインズ派経済学

とケインズの経済学』(二) 三二三

——貨幣理論の研究——

翻訳 張世英『ヘーゲルの論理学』(一) 三二五・六

〃 宮效聞他編著『社会主義企業管理』 二四一

社会主義社会の過渡期的性格 二四二

——毛沢東の社会主義政治経済学への画期的な貢献——

翻訳 復旦大学経済学部他編著『社会主義政治経

済学』 二四二

「有効需要の原理」とIS—LM分析 二五一

——ケインズ理論の現代的解釈によせて——

紹介 スティヴン・ルークス『社会科学における

三〇二(六三〇)

KEY CONCEPTとしての個人主義』

三〇二

角田修一

書評 『見田石介著作集 第一巻 ヘーゲル論理

学と社会科学』 三〇二

生活手段の資本主義的形態とその廃棄 二六—三〇五

梯 明秀

資本論の学的体系性 一—五六

——冒頭文節の体系的意味を分析するための序説として——

資本論冒頭文節の体系的意味 二一

諸商品集成の感性的直観(その一) 二五

——「資本論冒頭文節の体系的意味」の第三章として——

諸商品集成の感性的直観(その二) 二六

——併せて遊部、宇野、向坂の諸氏の所説について——

諸商品集成の感性的直観(その三) 三一

——併せて歴史的端緒説における宮川、向坂両氏の対立について——

賃労働者の向自有的論理構造

四四年手稿断片「疎外された労働」におけるマル

三—五

クスの哲学思想（上）

三—六

四四年手稿断片「疎外された労働」におけるマル

クスの哲学思想（中）

三—七

四四年手稿断片「疎外された労働」におけるマル

クスの哲学思想（下の上）

四—一

四四年手稿断片「疎外された労働」におけるマル

クスの哲学思想（下の中）

四—二

マルクス主義経済哲学原理

五—五

マルクス主義経済哲学原理（承前）

五—六

『資本論』体系の図式的解明（上）

七—六

『資本論』体系の図式的解明（中）

八—一

『資本論』体系の図式的解明（下の一）

八—三

経済哲学のための一般的序説

八—五—六

賃労働者の範疇的把握（上）

九—六

——マルクスの「商品人間の自己意識」の分析に限定して——

賃労働者の範疇的把握（中）

一〇—一

——マルクスの「商品人間の自己意識」の分析に限定して——

立命館経済学著者別目録

賃労働者の範疇的把握（下）

一〇—二

——「商品人間」と「労働人間」との媒介的統一として——

マルクス主義経済哲学の成立の必然性

一〇—五—六

経済学研究の出発点にある哲学的課題

一一—三

——四四年『手稿』におけるマルクス自身の思弁哲学についての分析的吟味として——

経済学研究の出発点にある哲学的課題（承前）

一一—三

——四四年『手稿』におけるマルクス自身の思弁哲学についての分析的吟味として——

研究ノート 法学と経済学との中間領域にある若干の問題（その一）

一一—三—四

——藤田勇氏の論文「法と経済との一般理論」についての部分的紹介と、それについての備忘録として——

資本論における方法と世界観（上）

一一—一

——その残された諸問題の一つについて——

資本論における方法と世界観（中）

一一—四

——その残された諸問題の一つについて——

その一）

一一—四

——その残された諸問題の一つについて——

三〇—三（六三—）

三〇—三

〃 資本論における方法と世界観(中、

その二)

一六―五六

―その残された諸問題の一つ
について―

〃 資本論における方法と世界観(中、

その三)

一九―

―その残された諸問題の一つ
について―

〃 資本論における方法と世界観(中、

その四)

一九―二

―その残された諸問題の一つ
について―

武藤君との同僚としての交わりにおける、その二

齣、三齣

一九―五

加藤睦夫

資本蓄積の租税構造論

―シャープ勧告の評価によせて―

九―四

戦後財政整理の性格

財政制度論の一視点

二―三

二―五六

―戦後初期における制度改革を中心として―

戦後地方経費の展開過程

三―二

北九州市における市税構造と諸階級

一四―五

法人課税の発展史的考察(上)

一五―五六

München 市財政の現況と問題点

一九―六

河合信雄

商法計算規定改正要綱法務省民事局試案について 九―四

川端久夫

研究 関西地方在住の炭鉱離職者の就労と生活状

態に関する調査報告(戸木田嘉久氏との

共同執筆)

一九―五

〃 関西地方在住の炭鉱離職者の就労と生活状

態に関する調査報告(統)(戸木田嘉久

氏との共同執筆)

二〇―五六

河野快晴

研究ノート 雇用理論に関するノート

三六―四

スタグフレーション分析に関する一試論(松川周

二氏との共同執筆)

—OECDマクラッケン・グループ報告書
よせて—

三〇一

研究ノート ケインズ経済学の意義と限界(一)

(北野正一、松川周二、山田彌氏

との共同執筆)

三〇一

—スキデルスキー編『ケインズ時代の終焉』をめぐって—

ケインズ経済学の意義と限界(Ⅱ)

(北野正一、松川周二、山田彌氏

との共同執筆)

三〇二

—スキデルスキー編『ケインズ時代の終焉』をめぐって—

川本和良

紹介 F・ノイマン『ビヒモス』

三〇二

〃 W・エンゲルス『ライン州における償却と

共有地分割』

三〇三

研究 十八世紀におけるライン繊維工業の展開と

『営業の自由』の前提条件(一)

三〇五

〃 十八世紀におけるライン繊維工業の展開と

立命館経済学著者別目録

『営業の自由』の前提条件(二)

三〇六

一八世紀後半および一九世紀前半におけるライン

・ウェストファーレン鉄加工業の発展と

市場構造

三〇七

ルール石炭鉱業の展開とプロイセン鉱業法(一)

三〇八

ルール石炭鉱業の展開とプロイセン鉱業法(二)

三〇九

ルール石炭鉱業の展開とプロイセン鉱業法(完)

三一〇

三月前期のプロイセンにおける「社会問題」と社

会政策および中間層政策の展開(一)

三一五

三月前期のプロイセンにおける「社会問題」と社

会政策および中間層政策の展開(二)

三一六

三月前期のプロイセンにおける「社会問題」と社

会政策および中間層政策の展開(三)

三一七

北野正一

寡占的諸行動とマクロ的影響について

三一四

—寡占価格論への一接近—

利潤と剰余労働

三一五

—固定設備の耐用年数の決定を中心に—

Harrodの長期不安定性について

三一六

三〇五 (六三三)

立命館経済学(第二十八卷・第三・四・五合併号)

三〇六(六三四)

景気循環の一モデル

三二五

景気循環における新旧技術の導入と廃棄について

三二二

景気循環の形態に関する比較動学的分析

三一一

研究ノート ケインズ経済学の意義と限界(一)

三〇一

(河野快晴、松川周二、山田彌氏

との共同執筆)

三〇一

——スキデルスキー編『ケイン

ズ時代の終焉』をめぐって——

ケインズ経済学の意義と限界(Ⅱ)

(河野快晴、松川周二、山田彌氏

との共同執筆)

三〇二

——スキデルスキー編『ケイン

ズ時代の終焉』をめぐって——

独占的諸行動と均衡経路の不安定性

二九三・三四五

北村元一

二重経済の諸問題

三二三・三四

——都市化と賃金較差の問題を
中心として——

木原正雄

広い意味での経済学について

三〇四

——社会主義経済学の生成と発展——

広い意味での経済学について(承前)

三〇一

——「社会主義経済学」の生成と発展——

広い意味での経済学について(承前)

三〇四

——「社会主義経済学」の生成と発展——

広い意味での経済学について(承前)

三〇一・二

——社会主義経済学の生成と発展——

社会主義経済学の生成と発展(承前)

三〇一

——「労働支出の法則」について——

木村一夫

三〇一

研究 「高度成長」期における農山村の変容

三二四

——岐阜県揖斐郡旧宮地村の調査——

農協による経営受託

三〇三

——大垣南機械化営農組合および第一
機械化営農組合の場合——

木村喜一郎

ツアイス工場

三二二

フォード五〇年 三一七

紹介 レッテル商品についての独乙文献二・三の

紹介 五―三

木村 静雄

立命館在職三十五年をふりかえって 二五―五六

桑原 幹夫

資料 割賦販売による未実現総利益の貸借対照表
における表示について 七―三

研究 アメリカにおける割賦販売の収益認識理論
の発展とその現実的基礎 七―五

資料 割賦販売の契約不履行および取戻し商品の
会計処理 八―三

——著者 H.A. Finney の所説に
ついで——

研究 割賦販売会計における総利益の算出方法 八―四

〃 アメリカにおける割賦販売の営業諸費用及
貸倒金の会計処理について 八―五・六

〃 わが国における割賦販売会計の理論 二〇―五六

立命館経済学著者別目録

〃 わが国における割賦販売会計の理論(続) 二―三

甲賀 光秀

搾取論・剰余価値論の論理 二〇―二

「均衡蓄積軌道」について 二―一

『独占資本主義分析』試論 二三―三

P. A. Samuelson の Marx 批判に
ついで 二四―一

結合生産・価値・剰余価値
——Marx 剰余価値論への新しいタイプの批
判について—— 二四―五六

産業構造研究の基礎視角 二六―三四・五

小島 昌太郎

株式会社の資本調達 六一―五

小檜 山政克

研究ノート 最近のソ連学界における「経済的社
会構成体」の研究 二五―三

労働価値論と需要供給の問題 二七―四

平均利潤率の形成と需要供給の関係について 二六―三四・五

三〇七 (六三三・五)

小牧 聖徳

研究 『特殊的生産』について

一一二

——「資本論」における保管費・運輸費の検討——

利子生み資本の変容

二一四

——近代的銀行業の成立をめぐる——

資料 アンリ・ドウニ『マルクスと資本主義経済

三一二

における現在の発展』

研究 貨幣資本の造出とその限界

三一五

アメリカにおける商業銀行の問題点

四一四

銀行機能の史的展開

五一二

戦後普通銀行政策の基本的性格

五一六

戦後における大銀行の推移

六一六

——預金、貸出、証券、借入を中心として——

貨幣取扱資本の成立と発展

七一四

——近代的銀行業の成立をめぐる——

中央銀行にかんする一考察

八一三

価値尺度機能と価格の度量基準機能

九一五

——天沼説への私見——

銀行資本の本質とその現象

二〇四

不換銀行券の本質

二一四

金融資本にかんする一考察

二二四

金融資本の検討（上）

三三四

金融資本の検討（下）

三三五

学界動向 金融学会昭和四十年春季大会

二四一

現段階の資金政策

二四一

——国家独占資本主義法則の貫徹——

金融資本における信用と国家

一六一二

産業資金と国家資金

一七三三

銀行資本における觀念論批判

一八一三

——研究方法との関連において——

現代貨幣資本の検討

三一二

——国家独占資本主義の貨幣資本供給

インフレーションの経済構造

三三一

——社会的動向と主体的発現

現実資本と貨幣資本の現代的発現

三三二

銀行信用・利子生み資本の論理的前提

三五二

——信用論批判——

戦後日本における現実資本と貨幣資本の展開

三六四

——量的指標と法則の貫徹——

公信用の展開

——信用、利子生み資本および国家との関連——

二六一

伍賀一道

研究 コンビナート社外労働者の集積基盤

二三五—二五六

——水島コンビナートの事例的研究——

後藤文治

研究ノート 県民所得統計の発展と県民所得標準

方式 一八—一五六

〃 県民所得統計の発展と県民所得標準

方式(統) 一九—一四

〃 県民所得統計の発展と県民所得標準

方式(統) 二〇—一四

〃 県民所得統計の発展と県民所得標準

方式(終) 二二—一四

〃 わが国における公式国民所得統計の

発展の沿革に関する年表 二五—一五六

後藤 靖

立命館経済学著者別目録

反民権論とその基盤

——土佐古勤王党の分析——

五—一六

反民権論とその基盤(二)

六—一

自由党の危機

六—五

土佐藩郷土制度の解体過程について(その一)

七—三

土佐藩郷土制度の解体過程について(その二)

七—五

資料 和歌山県地租改正反対一揆

九—一

土族反乱の構造的特徴について

一〇—一

土族反乱の構造的特徴について(二)

一〇—二

地租改正反対一揆について

一〇—四

民権運動研究の課題と方法

一一—一

学界動向 一九六五年度歴史学研究会大会

一一—二

資料 自由民権期の府県会闘争(一)

一六—一五六

——参事院・裁定書——

〃 自由民権期の府県会闘争(二)

一七—一

——参事院・法制局裁定書——

手嶋教授の人柄と学問

一九—四

資料 日本資本主義確立期の「会社」および「役

員名簿」(一)

二一—五

〃 日本資本主義確立期の資本の存在形態(一)

二二—四

三〇九(六三七)

〃	日本資本主義確立期の資本の存在形態(二)	三六一
〃	日本資本主義確立期の資本の存在形態(三)	三六三
〃	日本資本主義確立期の資本の存在形態(四)	三六四
〃	日本資本主義確立期の資本の存在形態(五)	三七一
〃	日本資本主義確立期の資本の存在形態(六)	三七二
〃	日本資本主義確立期の資本の存在形態(七)	三七四

斉藤 博

J・S・ミルの財政論

八一四

祭原光太郎

企業の指導原則としての収益性

一一四

経営における職制組織

一一五・六

経営学における労務の考察

一一一

経営設備

一四四

経営における組織の運営

一四六

紹介 H・R・ライト編『経営の本質』

一一二

〃 オートメーションと生産管理

一一四

経営政策の樹立

一一五

資料 計算機・オペレーションズ・リサーチ・線

型計画

五九六

管理における統制機能

七一六

経営者の社会的責任

八一三

マネジメント小論(一)

九一三

マネジメント小論(二)

九一四

坂野光俊

七〇年代地方財政の特徴について(一)

二六一

坂本和一

研究ノート 独占段階成立期の資本制的労働過程(一)・二・三

——鉄鋼業の場合——

独占段階における独自の・資本制的生産様式

一九一

独占段階における独自の・資本制的生産様式と資本蓄積過程

一九三

独占段階における独自の・資本制的生産様式の形成

一九五

——八幡製鉄所を事例とする具体的分析(一)——

独占段階における独自の・資本制的生産様式の形

一九五

成(統)

——八幡製鉄所を事例とする具体的分析(二)——

三〇一

独占利潤論の論理構成

——『資本論』の論理規定具体化の一つの試み——

三〇二

独占段階における独自の・資本制的生産様式の形

成(統)

——八幡製鉄所を事例とする具体的分析(三)——

三〇三

独占段階における独自の・資本制的生産様式の形

成(統)

——八幡製鉄所を事例とする具体的分析(四)——

三〇四

現代巨大企業における社会的労働過程のプロセス

構造

三〇五・六

研究ノート 『資本論』における産業資本の直接的生産過程論

——『資本論』第一部、第二、三、四篇の一解釈——

三一三・四

現代巨大生産単位における労働者の存在構造

——現在日本の銑鋼一貫製鉄所の場合——

三一三・四

現代巨大生産単位の生産方式

——現代の大量生産方式について——

三一五

立命館経済学著者別目録

現代巨大企業の生産機構

三一四

巨大企業分析と「生産の集積」概念の展開

三一三

研究ノート 現代資本主義の生産力発展段階

三一六

資料 現代アメリカ鉄鋼業の生産構造

三一七

坂寄俊雄

内職労働者の量的存在に関する調査と推定(上)

七一

——大阪府における実態調査を通じて——

内職労働者の量的存在に関する調査と推定(中)

七一三

——大阪府における実態調査を通じて——

内職労働者の量的存在に関する調査と推定(下)

七一五

——大阪府における実態調査を通じて——

経営統計の基本問題にかんする一試論

八四

労務管理の対象

一〇一

わが国最低賃金法について

一〇三

人口と就業状況

一一三

——国勢調査結果による——

桜井富雄

資料 フレット・エルスナー「独占価格と独占利

三一七 (六三九)

潤」(吉田伸雄、一井昭氏他三名共訳) 二六一

佐々木秀太

研究 独占価格の実態と方法的諸問題 二六一

〃 価格体系と価値法則 二六一

重田晃一

アルチュセールのマルクス主義論 二九一

——その一断面——

芝池靖夫

書評 中国官僚独占資本主義の本質問題について

(松野昭二氏との共同執筆) 二〇一

島津秀典

『帝国主義論』の方法についての一考察 一九一

——『帝国主義論』における展開と分析——

『帝国主義論』における段階規定 一九一

——『資本論』から『帝国主義論』への
発展と関連して——

清水潤也

資料 フレット・エルスナー「独占価格と独占利

潤」(桜井富雄・吉田伸雄氏他三名共訳) 二六一

清水憲一

研究 一九二〇年代造船業における資本制的労働

過程 二四一

——川崎造船所を中心に——

〃 一九二〇年代における造船大企業の蓄積構

造(上) 二五一

——川崎造船所の「破綻」を事例とし
て——

清水貞俊

欧州共同市場における若干の問題点 八一

研究 欧州経済共同体の性格 八二

——その「超国家的」性格をめぐって——

〃 地域開発と欧州投資銀行 二一四

E E C 内部の国際分業法則について 二一五

——合意的分業の原理によせて——

E E Cにおける資本移動自由化並びに企業提携と

それに附随する諸問題

一四一六

E E Cの共通エネルギー政策

一五一一

日本の近代化過程における貿易構造の変化

一六〇五・六

比較生産費説の展開

一八〇五・六

武藤守一先生を偲んで

一九一五

海外留学記 E C経済の最近の若干の問題点

二四一三

欧州共同体の地域経済問題(一)

二四一四

欧州共同体の地域経済問題(二)

二五一一

欧州経済通貨同盟の発展

二七〇六

清水正徳

「労働の疎外」と「労働力の商品化」

二一五・六

—— 梯明秀教授の所説によせて ——

『資本論』における科学と哲学

三二五・六

—— 梯明秀教授の所説によせて ——

白杉庄一郎

超過利潤と差額地代

九一一

—— 向坂説の検討 ——

立命館経済学著者別目録

差額地代にかんする剰余生産物説

九一五

—— 櫛田説批判 ——

(遺稿) 差額地代 II 不当価値説

二一・二

—— 山田説批判 ——

独占資本主義のもとの経済成長の限界

三二五・六

—— (遺稿) 「剰余価値の理論」の中の二節) ——

杉野 圓明

日本における鉄道政策の展開

一九一三

—— とくに第一次大戦後を中心として ——

経済地理学と世界経済

一九一四

—— 地政学批判 ——

経済地理学方法論における「経済地域」について

二〇一三

北九州における工業立地と土地利用問題

三一六

伝統こけしの経済的研究

三一三

資本価値の破壊に関する若干の問題

三三三・四

アジア的生産様式の基本的構造について

三三一

資料 志布志湾漁業経済分析資料(その一)

三五・五・六

翻訳 R・トレンズ「国内貿易について」

三六一

人口流出と地域的産業構成の変化

三六一二

三一三 (六四一)

資料 志布志湾漁業経済分析資料(その二) 三六―五

「地域主義」なるものへの批判 二七―五

——杉岡碩夫氏の所説について—— 二六―二

「地域主義」に対する批判(上) 二六―二

——玉野井芳郎氏の所説について—— 二六―二

「地域主義」に対する批判(下) 二六―三・四・五

——玉野井芳郎氏の所説について—— 二六―三・四・五

杉原四郎

河上肇と古典派経済学 一九―六

——『資本主義経済学の史的発展』を中心として——

杉本昭七

書評 建林正喜著『外国貿易と産業循環』 三三―三

鈴木敏正

翻訳 パルヴス『世界市場と農業恐慌』(一)(大畧) 三三―三

輝雄氏との共訳(以下同) 三三―三

〃 パルヴス『世界市場と農業恐慌』(二) 三三―四

〃 パルヴス『世界市場と農業恐慌』(三) 二四―三

〃 パルヴス『世界市場と農業恐慌』(四) 二四―四

住ノ江佐一郎

証券市場規定と第二市場 三三―三

グラハム・ドッドにおける有価証券の分類 三三―四

について 三三―四

ダウ理論にたいする二つの批判 四一―一

証券価値論への前提 四一―二

米国における株価論争 四一―四

——米国内院銀行通貨委員会における
株式市場調査に関する覚書—— 四一―四

株式投資論の構造について 五一―一

証券市場における取引の客体としての有価証券の
本質と機能について(上) 五一―三

無額面株式試論 五一―四

紹介 J・グロヂンスキーにおける『市場分析』 五一―五

株式価格の構成にかんする二つの見解 六一―三

——ドンナーとレフラーのばあい——

J・B・ウィリアムスの「投資価値理論」におけ

る株価分析の構造

株価分析の重要性について

——戦後日本における株価動向、株式資本の調達、および株主株式の分布との関係を一つの事例として——

八一

第二市場論(一)

証券の上場について

八一五六

証券分析の証券投資理論における地位

九一三

第二市場論(二)

地方証券取引所の諸問題

九一三

ヒルファーディングにおける株価分析

二〇一三

関 弥三郎

統計的方法の本質

一一一

講座 統計調査法

一一三

〃 任意標本調査法(一)

一一四

〃 任意標本調査法(二)

一一一

〃 任意標本調査法(三)

一一三

〃 任意標本調査法(四)

一一四

〃 任意標本調査法(五)

一一六

立命館経済学著者別目録

紹介 ソヴェトにおける統計学方法論争

三一

社会統計学における統計的方法と非統計的方法の性格

四一四

——ジージェックを中心として——

直交多項式による傾向線の当嵌め

五一二

紹介 O・モスト『一般統計学』

五一四

ミュンヘン・景気調査法とその統計的性格

六一四

——新しい推算統計の一例——

月別傾向線の当嵌め方法

七一

直線傾向線と季節指数の図的計算

八一

社会統計における統計的規則性の意義と限界

二〇一三

社会統計における母集団の意義

二一三

書評 有田正三著『社会統計学研究』

二一四

県外からの勤労所得による県民所得統計の補正

二四二

学界動向 経済統計研究会第九回全国総会

二四三

わが国の出生性比の上昇について

二七三

武藤守一先生を偲んで

二九一

失業意識調査と最近の就業希望者の特徴

三一三

実体分布と度数分布

三二一

寄与率についての一考案

三六三

高尾忠男

講座 税務会計における貸倒準備金の繰入処理

二二二

研究 税務会計上の一考察

二二三

——ダイダックションを中心として——

内部索制組織の弱点について

二一六

研究 税務監査の目標について

三三三

——税務会計と財務監査を基底として——

税務監査をめぐる若干の問題

四一四

税務における監査の在り方

五一五

インヴェントゥリ・リザーヴに関する吟味

六一六

貸借対照表監査と損益計算書監査

七一六

高木幸二郎

『資本論』と「競争」論

三三三三四

高橋良三

教父のおよびスコラの所有観

一一四

ルネサンス・レフォルマチオン期における所有

観(上)

正義の座としての自然法思想の展開(上)

二一四

正義の座としての自然法思想の展開(下)

五一五

正義の担い手としての国家と社会

五一六

書評 カール・ビュヒアー『国民経済進化論』

六一四

第二集

七一

——淡川康一教授の訳業について——

経済と政治における自由の展生(一)

二二三

——その史的概観——

経済と政治における自由の展生(二)

三一一

——その史的概観——

経済における国家の問題(一)

三三一四

経済における国家の問題(二)

三三一三

高見沢茂治

東南アジア貿易の振興と経済開発について

一一五六

いわゆるカントリー・ダメージについて

四一四

田坂敏雄

研究 タイ地主制下の米価問題

三三三

翻訳 イングラム「タイの米価問題」

一五—

研究 タイ農民層分解の論理

一六—三

——タイ中部の農家経済の分析を中心とした試験——

建林正喜

自然成長率にかんする覚え書

一三一—二

不安定性原理について

一三—六

書評 梅津和郎著『現代国際経済論』

一四—二

不均等発展と不均衡発展(その1)

一四—四

不均等発展と不均衡発展(その2)(完)

一四—六

資料 工業都市の市民所得

一五—五・六

〃 商業都市の市民所得

一六—一

学界動向 第十四回都市学会

一六—一

実現理論としての成長理論

一八—五・六

——ハロッド・ロドーマー・モデルの
一つの解釈——

資料 近代経済学における数学利用

一九—三

——その問題意識と利用方法 (The
Review of Economics and Sta-
tistics, Nov. 1954 シム・ホジキ
ムを回顧し)——

立命館経済学著者別目録

マルクス経済学における数学利用

一九—六

——その問題意識と基礎について——

国家・外国貿易と再生産

二〇—三

——国家独占資本主義分析のための準備ノ—

独占利潤の法則と世界市場恐慌

二〇—四

——国家独占資本主義分析のために——

「総供給価格」考

三一—二

——E—K分析からD—Z分析へ——

経済学研究四十年を回顧して

三一—三・四

晴丸さんの想い出

三一—五・六

乗数理論の「うそ」と「まこと」

三一—一

田中宏道

研究 第二次大戦後の米国における産業循環の法

三一—五・六

則と各局面の形態について

ヒルファディングの『金融資本論』の背景と金融

三一—四

資本概念について

田中米一

経営分析の新しい概念

一〇三

津島陽子

紹介 「現代自主管理論の動向——マンデルの自

主管理論——」

三三—三四

現代自主管理論と民主主義の諸問題

三三一—

——バンカールの民主主義論——

紹介 最近の西ドイツ・フランス・アメリカの自

主管理運動について

三三—三四

一八四〇年代後半におけるマルクスの経済学研究

の特徴について

三五—五六

ブルードン信用論の展開

三六—三七

——交換銀行論とその経済学的基礎理論について——

辻 和夫

紹介 W・アダムス、H・M・グレイ『アメリカ

における国家と独占』

七一

研究 国有企業経営管理機構序説(その一)

七一五

——英国公共企業体の研究——

〃 国有企業経営管理機構序説(その二)

七一六

——英国公共企業体の研究——

Dixon-Yates 契約について

八一三

——国家と独占資本との合体の一例証——

研究 国有企業価格政策論争について

九一五

津ノ国長四郎

財務諸表の分析における基礎的一問題

一一二

——アカウンティングコンヴェンションについて——

会計学上に所謂発生主義と実現主義に関する若干

の考察

二一六

——発生主義と発生主義の会計について——

減価償却と客観性の要請

三一五

発生主義の会計における実現主義の問題

三一七

アメリカに於ける会計理論と実践の展開

四一四

角山 栄

一八世紀イギリスの貿易構造

一〇三

アイルランド羊毛工業の抑圧 二二・三
——イギリス重商主義論——

鶴谷利一

資料 フレット・エルスナー「独占価格と独占利
潤」(桜井富雄・吉田伸雄氏他三名共訳) 六一・二

手島正毅

現代資本主義と利潤率傾向的低落の法則 三三・三
——独占と技術革新——

国家独占資本主義の研究 四一・二
利潤率低下の阻止要因としての独占の意義と限界 五一・一

——私的独占より国家独占への
移行法則として——

過渡期における国家資本主義の諸形態 六一・五・六

資料 中国における国家資本主義・賃金制度にか
んする諸問題 七一・一

——往復書簡の抜粋——

高度経済成長過程における『自動安定装置』と国
家所有(素描) 八一・五・六

——戦後日本経済の発展過程への
その具体的適用——

立命館経済学著者別目録

遺稿 私の履歴書 一九・四

寺島 平

研究 保険差益の会計処理について若干の考察 一一・二

資料 LIFO 価額指数構成方法 一三・三

研究 棚卸資産評価について 二一・三
——現行税法をめぐって——

〃 原価管理における原価計算課の機能 三二・二

資料 原価管理における原価計算の役割 三三・五

研究 「標準原価計算」に関する若干の考察 三六・六

いわゆるダイレクト・コストの吟味 四一・四

資料 小規模企業組織に適用される原価管理 五三・三

損益分岐図表に関する一考察 八五・六
——その信頼性と有用性について——

出口勇蔵

『その意欲だにあらばオーストリアは万国を凌が
ん』 二二・二

——ヘルニク研究序説——

三二九 (六四七)

東郷久

研究 戦後日本資本主義の生産力構造と公共投資 二五―五六

——「高度成長」下の港湾投資対象を例として——

〃 財政危機下の総需要抑制策と景気浮揚策に

関する一考察 二六―六

遠山茂樹

書評 後藤靖著『土族反乱の研究』 二六―五六

戸木田嘉久

石炭危機の本質と石炭調査団の限界 二一―四

最近の資本蓄積と低賃金構造(上) 二三―三

最近の資本蓄積と低賃金構造(下) 三三―四

「産業革命」以前における石炭鉱業の形成 二五―二

——日本炭鉱労働者状態史のための覚書(1)——

戦後炭鉱労働運動の展開過程(一) 二六―一

戦後炭鉱労働運動の展開過程(二) 二六―五六

学界動向 社会政策学会第三六回大会 二六―五六

研究 関西地方在住の炭鉱離職者の就労と生活状

態に関する調査報告(川端久夫氏との共

同執筆) 一九―五

〃 関西地方在住の炭鉱離職者の就労と生活状

態に関する調査報告(統)(川端久夫氏

との共同執筆) 二〇―五六

労働貴族論にかんする若干の覚書 三一―五六

翻訳 フランスにおける労働者とその家族の権

利(一) 二四―四

——フランス労働総同盟『ポケット法

律便覧』から——

〃 フランスにおける労働者とその家族の権

利(二) 二四―五六

——フランス労働総同盟『ポケット法

律便覧』から——

〃 フランスにおける労働者とその家族の権

利(三) 二五―一

——フランス労働総同盟『ポケット法

律便覧』から——

豊崎稔

書評 手島正毅教授著『日本国家独占資本主義

中 埜 肇

学界動向 へーゲル・コングレス報告

中村萬次

アメリカ独占体の財務構造

長 砂 実

書評 小野一郎・篠原三郎編『社会主義的所有と

管理』

西村正幸

A・デ・ヴィティ・デ・マルコの財政理論

——その公共財生産理論を中心として——

長谷部文雄

『資本論』初版以後とその各国における普及状況 二六—三四

服部俊治

減価償却における更新機会

——George Terborgh 氏

減価償却論研究(一)——

研究 資本予算と減価償却

——投資利益率に及ぼす加速的減価償却の効果——

浜崎正規

研究 O.H. Taylor のシュムペーター学説にお

ける「帝国主義論」「社会階級論」の位置

づけについて

紹介 C・S・ソロー「資本主義過程における革

新」

——シュムペーター理論の批判——

研究 「企業者」と資本主義過程の「革新」につ

いて

——シュムペーター学説の主要問題——

〃 シュムペーター経済学的方法論的一考察

紹介 C・ワーバートン「シュムペーター学説に

おける貨幣および景気変動」

研究 景気変動理論についての一試論 三一六

——シムムベーターをめぐって——

資料 T・B・ヴェブレン方法論の論難 四一三

紹介 G・J・スチグラー「科学的進歩における

独創性の性格と役割」 四一六

〃 M・フリードマン『L・ワルラスと彼の経

済学体系』 五一四

資料 F・ハービンソン「経済発展における要因と

しての企業者組織」 六一二

G・ミュルダールの低発展国開発論 七一三

低発展国開発論をめぐる原理的一問題 八一三

——P・T・パウアー氏のミュルダール批判—— 一〇一三

G・ミュルダールの価値判断論 一一一三

発展戦略の再検討 一一二六

——低開発国の発展拠点の問題—— 一三一六

「地域開発」論序説 一四一三

——いわゆる「社会開発」問題との関連で—— 一五一一

学界動向 日本経済政策学会第二十二回大会 一五一一

資料 労働力不足と中小企業の実態(一) 一五一一

——近畿地方のケース・スタディを中
心として——

〃 労働力不足と中小企業の実態(二) 一五一一

——近畿地方のケース・スタディを中
心として——

スウエーデンにおける「ケインズ革命」論考 一五一一

シムムベーター・モデルの再検討(上) 一七三三

——開発理論形成のための

適応論争をめぐって——

研究ノート J・K・ガルブレイス『不確実性の

時代』考 一七三三

——主要著作との位置づけを
めぐって——

近代経済学における科学性・客観性論 一六三三・四一五

——

朴 守 鉉

韓国の工業化過程 一三二五

——解放後の問題を中心にして——

——

口 南田 静 真

帝国主义論と「二つの道」論 一三二五・六

——スクウォルツォーフィリスチェパノフの

場合——

平井俊彦

「梯経済哲学」を生かすもの

二一五・六

平瀬巳之吉

白杉独占理論の構造

二一・二

——特別剰余価値は独占利潤の源泉でありうるか——

書評 岡崎栄松『資本論研究序説』

二七一

平田隆夫

書評 労働問題に関する新著二つ

一一四

(一) 米国連邦労働省編『米国労働運動小史』

一九五一

(二) 国際労働局編『永続的平和——国際労働機関の進路』一九五一

労働協約と社会保障

一一五・六

世界労連の結成と分裂

三一七

経営参加と労働協約

四一四

アメリカ労働組合運動の戦線統一

五一一

——AFLとCIOの合同について——

立命館経済学著者別目録

書評 AFLとCIOの合同をめぐる論議

六一三

——Arthur J. Goldberg, AFL-CIO:
Labor United. New York, Mc
Graw-Hill Book Co., Inc. 1956,
xiii 319 pp. を読む——

大学と労働者教育

一〇三

西独の労働者教育

二一五・六

藤岡純一

研究 重化学工業資本の強蓄積と租税政策

二四三

〃 シャープ勧告と戦後日本の資本蓄積

二五二・三

〃 日本資本主義の発展とシャープ勧告

二五二・五・六

〃 現代日本企業税制の諸要因

二六五

〃 行政事務再配分における総合化原則

二七五

——現代地方財政論序説——

藤谷謙二

住民税論

二一七

船越 弘

資料 経営管理と管理会計

四一六

——ゲェッツの所論を中心として——

三二三 (六五一)

立命館経済学（第二十八卷・第三・四・五合併号）

管理会計の経営的性格

五—四

振津純雄

翻訳 西ドイツ経済の軍事化

三—三四

〃 西ドイツ農業における国家独占資本主義

三—五六

〃 国家独占資本主義におけるブルジョア経済

三—四

学の機能

保志 恂

再生産論と地代論

三—五六

——農業危機把握と止揚の理論的一基準——

細見 英

研究 〓疎外された労働〓の概念(一)

九—一

〃 〓疎外された労働〓の概念(二)

九—二

資料 J・ミル『政治経済学綱要』への批判的評

注

一〇—四

——マルクスの最初の経済学研究より——

ヘーゲル市民社会論とマルクス

二—一二

三二四（六五二）

書評 杉原四郎著『マルクス経済学の形成』

三—二

学界動向 経済学史学会関西支部会第四〇回研究会

二—一

——マルクス主義における〓思想と科学〓の〓論理と歴史〓——

〃 経済学史学会第三一回大会

一六—五六

紹介 『経哲草稿』第一草稿の執筆順序

一—三

——N・I・レービン論文の紹介——

堀江保蔵

書評 足立政男著『丹後機業史』

三—二

松川周二

価格不確実性下の完全競争企業

三—一

、スタグフレーション分析に関する一試論（河野快晴氏との共同執筆）

三—一

——OECDマククラッケン・グループ報告書

によせて——

三—三

寡占企業の最適広告支出に関する小論

研究ノート ケインズ経済学の意義と限界(Ⅰ)

(山田彌、北野正一、河野快晴氏)

との共同執筆) 六一一

——スキデルスキー編『ケインズ時代の終焉』をめぐって——

ケインズ経済学の意義と限界(Ⅱ)

(山田彌、北野正一、河野快晴氏

との共同執筆) 六一二

——スキデルスキー編『ケインズ時代の終焉』をめぐって——

松田弘三

ドップ恐慌論の検討 一一五六

——恐慌論の基本問題について(一)——

スウィーージー恐慌論の批判 二一二

——恐慌論の基本問題について(二)——

講座 剰余価値説の成立過程(一) 二一五

〃 剰余価値説の成立過程(二) 二一六

マルクス経済学の成立過程に关する一考察 三一一

——剰余価値論の生成を中心として——

研究 資本蓄積および恐慌に关するリカードの

理論とセーの市場法則 五一一

立命館経済学著者別目録

リカードの絶対価値論について 五一六

——「絶対価値と交換価値」(一八二三年)を中心として——

資料 労働価値説と史的唯物論の成立 六一四

——ローゼンベルグ『初期マルクス経済学説の形成』によせて——

オーウェン主義の生成 七一二

——ニュー・ラナーク実験と工場法運動——

オーウェン主義の成立 七一四

——一八一五年恐慌とロバート・オーウェン——

オーウェン主義の完成 八一

——『ラナーク州への報告』を中心とするオーウェンの経済思想——

労働価値論の生成に关する一考察 八一三

——その自然価格論との関連を中心として——

イギリスにおける経済学史研究の現状一斑(一) 二一三

——ケムブリッジ大学におけるその近況を中心として——

イギリスにおける経済学史研究の現状一斑(二) 二一四

——ケムブリッジ大学におけるその近況を中心として——

独占的剰余価値と価値・価格理論 二一五六

——平瀬教授の白杉独占理論批判の検討——

三二五 (六五三)

松野昭二

「土地報酬」にかんする基本的考察 八―五六

——中国農業の集団化・農業生産協同組合における特徴の解明のために——

農村人民公社の所有制と發展構造 二〇―三

——「生産隊を基本とする三級所有制」——

中国国民經濟の發展過程(一) 二二―四

——工・農業關係の發展を中心として——

中国国民經濟の發展過程(二) 二二―一

——工・農業關係の發展を中心として——

資料 董輔勛「マルクス再生産表式的具体化につ

いての試論」 二二―四

——社会的生産物の生産と使用の統一的角度から——

董輔勛「ことなる拡大再生産の途の下での

社会主義的再生産の比例關係について」 三三―三

——マルクス再生産表式的具体化についての再論——

董輔勛「生産物の分配・使用と二部門比例

との關係

——マルクス再生産表式的具体化についての検討(第三部)——

書評 今堀誠二著『毛沢東研究序説』 二六―三

資料 駱耕漠「『資本論』第一章第四節の要点と

疑問についての試論」 二六―三〇

——『經濟研究』誌一九六三年第五期——

資料 調整期における国民經濟と対外貿易 二七―三

書評 中国官僚独占資本主義の本質問題について

(芝池靖夫氏との共同執筆) 二〇―五・六

三 富紀敬

研究 戦後における企業内教育の展開 二四―五・六

「完全雇用」保障計画と公共職業訓練 二五―三・三

——『賃労働の理論』の批判的検討によせて——

民生委員の階級的基盤 二六―三

訓練付一時婦休の經濟的基盤と諸結果 二七―二

箕浦格良

附加価値税の本質 一一―

ヒュー・ダルトンに於ける経費に関する理論	一五・六
事業課税の外形と本質	二二
カメラリスムスに於ける財政思想	三三・四
アダム・スミスの財政論	三五
J・S・ミルに於ける財政思想(一)	四二
J・S・ミルに於ける財政思想(二)	四四・五
研究 フランソア・ケネーに於ける財政思想	八五・六
官房学派に於ける財政思想	九三
古典学派に於ける財政思想(一)	九六
—— A・スミスとJ・S・ミルの租税原則論の展開 ——	
A・スミス、D・リカアドオ、J・S・ミルに於ける租税理論の展開	二二二
—— 古典学派に於ける財政思想(二) ——	
A・スミス、D・リカアドオ、J・S・ミルに於ける租税転嫁論の展開	二二三
—— 古典学派に於ける財政思想(三) ——	
A・スミス、D・リカアドオ、J・S・ミルに於ける租税転嫁論の考察	二二四
—— 古典学派に於ける財政思想(四) ——	

立命館経済学著者別目録

A・スミス、J・S・ミルに於ける国家経費に関する理論の展開 I	三二五
—— 古典学派に於ける財政思想(五) ——	
A・スミス、J・S・ミルに於ける国家経費に関する理論の展開 II	三二六
—— 古典学派に於ける財政思想(六) ——	
A・スミス、J・S・ミルに於ける国家経費に関する理論の展開 III	三二七
—— 古典学派に於ける財政思想(七) ——	
A・スミス、D・リカアドオ、J・S・ミルに於ける公債に関する理論の展開 I	三二八
—— 古典学派に於ける財政思想(八) ——	
学界動向 日本財政学会第二十二回大会	三二九
A・スミス、D・リカアドオ、J・S・ミルに於ける公債に関する理論の展開 II	三三〇
—— 古典学派に於ける財政思想(九) ——	
A・スミス、D・リカアドオ、J・S・ミルに於ける公債に関する理論の展開 III	三三一
—— 古典学派に於ける財政思想(十) ——	
A・スミス、D・リカアドオ、J・S・ミルに於ける公債に関する理論の展開 III	三三二

ける租税理論の展開II

一五—三

——古典学派における財政思想(十一)——

A・スミス、D・リカアドオ、J・S・ミルにお

ける租税理論の展開III

一五—四

——古典学派における財政思想(十二)——

A・スミス、D・リカアドオ、J・S・ミルにお

ける租税理論の展開IV

一五—五六

——古典学派における財政思想(十三)——

学界動向 日本財政学会第二十三回大会

一五—五六

A・スミス、D・リカアドオ、J・S・ミルにお

ける租税理論の展開V

一六—一

——古典学派における財政思想(十四)——

A・スミス、D・リカアドオ、J・S・ミルにお

ける租税理論の展開VI

一七—一

——古典学派における財政思想(十五)——

三 好正巳

労働力政策に関する覚え書

一八—二三

戦時労働市場に関する研究

一八—五六

書評 加藤佑治著『日本帝国主義下の労働政策

——全般的労働義務制の史的究明——』

(統)・戦時労働市場に関する研究

二〇—一

——「農工調整」問題を中心として——

戦時賃銀統制に関する研究(その一)

二〇—五六

——国家独占資本主義賃銀統制の必然性につ

いて——

書評 狭田喜義『職能給の理論と方法』

三一—一

戦時賃銀統制に関する研究(その二)

三一—三四

——国家独占資本主義賃銀統制の内容——

現代社会政策論の課題

三一—三四

「高度成長」と社会「安定」装置

三五—四

現代社会政策論の視座と対象

三五—五六

現代社会政策論の起点

三六—一

国家と労働者階級

三六—四

——植民地労働者と民族自決権——

武藤守一

資本主義貨幣と社会主義貨幣

一一—

財閥解体政策の基盤とその変遷

一一—五六

——日本経済の従属化と軍事化への序説——

マルクスに対立する貨幣理論批判	三一
日本信用体系における国家的銀行資本の地位と役割	三一
——その一、従属化、軍事化の資金的中心としての日本開発銀行——	三一
日本輸出入銀行	三一
——従属化、軍事化の貿易金融中心としての——	三一
日本長期信用銀行	三一
——日本経済従属化軍事化の設備金融中心として——	三一
資料 新中国の人民券の本質と機能について	四一
——過渡期の貨幣の本質と機能について——	四一
——新民主主義社会における金利の性格	四一
——沈志遠著『政治経済学大綱』	五一
——狄超白『中国の過渡期における社会主義経済の発展と経済法則』	五一
——式文『中国の過渡期における基本的経済法則についての意見』	五一
——莊鴻湘『中国の過渡期における客観的経済法則に関する若干の意見』	五一
立命館経済学著者別目録	五一

朝鮮民主主義人民共和国の通貨、金融	六一
中国の銀行業と貨幣改革の発展情况	七一
中国人民大学『資本主義国家の貨幣流通と信用』	八一
紹介 本多直重氏「日本銀行の機能と政策」	八一
池田経済成長政策の矛盾	三一
資料 菅大同『中国における資本主義商工業の社会主義改造』	三一
——第八章「マルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国革命の具体的実践との結合の勝利」——	三一
敗戦直後における通貨金融政策の独占資本的性格	四一
日本資本主義の各発展段階におけるインフレーションの諸形態と諸特徴	五一
資本自由化と中小企業	五一
遺稿 ドル危機と日本経済	五一
——国ならびに地方自治体の財政について	五一
村瀬武三郎	五一
紹介 T・E・ミッド・国際収支論	五一
——国際経済政策理論第一巻——	五一

本岡昭良

研究 『資本論』の学問的体系と『帝国主義論』八一五六

森 啓子

研究 独占と恐慌

一七一

——いわゆる自己回復力の喪失について——

森 哲彦

資料 フレット・エルスナー「独占価格と独占利

潤」（桜井富雄・吉田伸雄氏他三名との

共訳）

一六一二

森川 信

アメリカにおける労働組合の特質と協約のパター

ンについて

一一五・六

研究 米国の綿花生産とその処理策

二一六

安井修二

フィリップス曲線を含む不均衡動学モデル

三三三・四

山口真三

武藤守一先生を偲んで

一九一五

山田邦臣

書評 R. T. Bye 「社会経済と価格体系」

一一一

——厚生経済学に関する論文——

研究 連関財に関する一考察（一）

二二二

〃 ヒックスにおける代替補完概念の吟味

二一五

——連関財に関する一考察（二）——

利子率決定要因に関するF・H・ハーンの見解に

ついて

六一六

山田 彌

研究 正規母集団であることの検定について

三一二

研究ノート 計量経済学批判における若干の

問題点

三一五

〃 ケインズ経済学の意義と限界（一）

（北野正一、河野快晴、松川周二

氏との共同執筆) 三〇一

——スキデルスキー編『ケインズ時代の終焉』をめぐって——

ケインズ経済学の意義と限界(Ⅱ)

(河野快晴、北野正一、松川周二

氏との共同執筆) 三〇二

——スキデルスキー編『ケインズ時代の終焉』をめぐって——

山中隆次

書評 梯明秀著『経済哲学原理』 三〇六

山本幹夫

研究 一九世紀末「大不況期」の過剰資本と生産

の集積 二四一—三

——ドイツ石炭・鉄鋼業を事例として——

資本集中と過剰資本の累積 二五—四

独占段階の過剰資本 二六—六

価格決定機構と産業組織 二七—三

——西陣織物工業の事例的研究——

立命館経済学著者別目録

吉田伸雄

資料 フレット・エルスナー「独占価格と独占利

潤」(桜井富雄・一井昭氏他三名共訳) 二六一—二

吉村達次

宇野氏「経済法則」論批判 二一五—六

吉矢友彦

資料 マックス・ウエーバー『東エルベ農業労働

者の状態における発展諸傾向』(一)(大藪

輝雄氏との共同執筆) 二三一—四

マックス・ウエーバー『東エルベ農業労働

者の状態における発展諸傾向』(二)(大藪

輝雄氏との共同執筆) 二三一—五

若林洋夫

書評 坂本和一著『現代巨大企業の生産過程』 二二—二

産業資本主義段階における近代的独占の存在形

態(一) 二四—五六

——北東イングランド石炭独占の歴史的 성격——

三三一— (六五九)

産業資本主義段階における近代的独占の存在形

態(二)

二五—二三

——北東イングランド石炭独占の歴史的性格——

産業資本主義段階における近代的独占の存在形

態(三)

二六—二

——北東イングランド石炭独占の歴史的性格——

産業資本主義段階における近代的独占の存在形

態(四)

二七—一

——北東イングランド石炭独占の歴史的性格——

産業資本主義段階における近代的独占の存在形態

(五・完)

二七—二

——北東イングランド石炭独占の歴史的性格——

翻訳 J・R・マカロック著『石炭税制改革論』

(上)

二七—五

〃 J・R・マカロック著『石炭税制改革論』

(下)

二八—一